

## 会 議 録

会議名 (審議会等名)		令和3年度 第4回社会教育委員会議定例会		
事務局 (担当課)		生涯学習部生涯学習課 電話042-769-8286 (直通)		
開催日時		令和4年2月14日(月) 午前10時～正午		
開催場所		相模原市役所第2別館3階 第3委員会室		
出席者	委員	13人(別紙のとおり)		
	その他	0人(別紙のとおり)		
	事務局	7人(生涯学習課長、他6人)		
公開の可否		<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由				
会議次第		1 議題 (1) 正副議長の選出について (2) 令和4年度相模原市社会教育関係団体への補助金の交付について (3) 今後の研究調査について ア 前期の経過「公民館と地域づくりをめぐる議論の経過」について イ 今期のスケジュール案について ウ 小委員会の設置について エ 市民アンケート調査について  2 その他		

## 議 事 の 要 旨

### 1 議題

#### (1) 正副議長の選出について

委員の互選により、議長に古矢委員、副議長に大谷委員が選出された。

#### (2) 令和4年度相模原市社会教育関係団体への補助金の交付について

事務局より教育委員会からの諮問について説明を行った後に協議し、承認された。主な意見は次のとおり。

(議長) 相模原市地域婦人団体連絡協議会は、コロナ禍のため2年度の研修を中止したとのことだが、3年度の研修はいかがか。

(事務局) コロナ禍のため3年度も事業の多くが中止となっている状況であるが、SDGsに関する課題別研修会や、地区別研修会で悪徳商法の被害を防ぐための講習会、交通安全の折り鶴キャンペーンなどを行ったと団体から伺っている。

#### (3) 今後の研究調査について

ア 前期の経過「公民館と地域づくりをめぐる議論の経過」について  
事務局より資料に基づき説明を行った。

(水谷委員) 資料3-1 P5のアンケート調査というのは、公民館を活性化するもしくはコロナ禍における新たなアプローチの具体的な案を作成するために行う調査という捉え方でよいか。

(議長) その通りである。

イ 今期のスケジュール案について

事務局より資料に基づき説明を行った。

ウ 小委員会の設置について

事務局より資料に基づき説明を行い、研究調査における小委員会の設置及び議事運営(案)について承認された。

また、小委員会は以下の7名の委員で構成することとなった。

なお、欠席された雨宮委員については、別途本人に確認の上決定することとした。※令和4年2月21日に、雨宮委員より了承いただいた。

- |          |        |       |       |
|----------|--------|-------|-------|
| ・小泉(勇)委員 | ・大谷副議長 | ・若林委員 | ・秦野委員 |
| ・古矢議長    | ・水谷委員  | ・雨宮委員 |       |

エ 市民アンケート調査について

事務局より資料に基づき説明を行った後、協議した。主な意見は次のとおり。

(議長) 市政に関する世論調査は、質問項目を追加する時間的猶予はないか。

(事務局) 提出期限が迫っているため、委員皆様の了解を得た上で、事務局の方で質問項目等の事務を進めさせていただきたい。

(秦野委員) 資料 3-6 の中で、公民館を利用しない理由についての質問項目があったが、今後のアンケート調査では、なぜ利用しにくいのか、どのような魅力があれば来てくれるのかという質問をしていきたいと思っている。委員が直接関われる調査方法（市又は公民館ホームページ、公民館配架による調査）に関しては、今後議論の余地があるということによいか。

(事務局) その通りである。

(議長) 秦野委員から意見のあった、どのようにしたら魅力的な活動になり、参加してもらえるようになるのかは、とてもいい質問であり、私たちが一番腐心しているポイント、要所である。

(副議長) 公民館の関係者、館長等への調査はあるのか。

(事務局) 前期議論にて、先程のアンケート調査とは別に、ヒアリング調査として公民館現場の方々との意見交換やインタビューの場を設けたいということを引き継いでいる。座談会又は研修会形式で行うのか、一カ所に集まる又は各区に別れて行う等、色々なやり方があると思う。まずは、小委員会にて方法等を議論し、定例会で皆様と共有していきたい。

(副議長) 資料 3-6 の調査のように経年比較が必要な質問事項もあるが、他にどのようなことを調べるべきかについて公民館へ意見を聞く機会はあるか。

(事務局) 聞いてほしいアンケート内容について、公民館現場の方から意見を聞くということか。

(副議長) その通りである。

(事務局) それも含め小委員会の中で議論させていただきたい。

(秦野委員) 小委員会の中で議論するにしても、どのようなアンケート内容がいいかという直接的な聞き方ではなく、各社会教育委員が公民館や社会教育に関わる方と接する中で調査に生かせそうな事項等を聞いてきていただき、それを社会教育委員会議に持ち寄れば、副議長がいうように公民館現場の意見を調査に反映できるのではないか。

小委員会の中で議論するというよりは、委員全員が現場の意見を聞き取り、持ち寄れるといい。

(議長) 秦野委員から、委員の皆様がそれぞれのポジションで、公民館の方にどのような質問があるといいか意見を聞き、収集してはどうかという提案をいただいた。公民館からの意見について、委員の皆様が日頃活動する中で聞

いていることもあると思うが、小委員会が開催されるまでの間に公民館現場の意見を集めることは可能ではないか。

(秦野委員) 協力いただける前期の社会教育委員にも意見を聞けるといい。

(議長) 各自、日頃活動する中で公民館から聞き取った意見を定例会に持ち寄り、協議するため、皆様に協力をお願いしたい。

(金子委員) 資料 3-6 の調査では、市民の郵送回答率はどれくらいか。

(事務局) 資料 3-6 P3 に記載のとおり、54.2%である。

(議長) 回答率は約 50%とのことだが、これは回答率として高いか。

(事務局) 統計学的調査では、郵送回答率 50%は非常に高い数値である。通常の回答率は 2~3 割程度であると聞いている。なお、令和 3 年度市政に関する世論調査の回答率は 47.6%である。

事務局としても、次回の定例会前に、公民館館長代理会議等で、例えばどのようなアンケートがいいか、どのような聞き方がいいかなど、意見の聞き取りを行いたいと思う。

(議長) アンケート調査については、資料 3-5 に記載の調査手法で進めるということによろしいか。

(全委員) 承認する。

(議長) ヒアリング調査については、小委員会で大枠を固め、定例会に報告して議論した上で進めたいと思うが、まずは小委員会に作業を移すということによろしいか。

(全委員) 承認する。

(秦野委員) 資料 3-2 のスケジュール案について、事例検討の必要があるが、その項目がスケジュール案から抜け落ちている。事例収集については、事務局が持っている各公民館の事業まとめ資料の提供、各委員がそれぞれ関わらる中で市内外も含めた好事例があれば会議の中で共有できるといい。

また、今回の研究調査のまとめの作成には時間を要すると思うが、このスケジュール案では作成期間が非常に短いため、時期をずらすなど、ヒアリング調査の進み方や事例の集まり具合、まとめ方の検討をしながら見直しを行えるといい。

(議長) 作成期間の見直しについては、令和 4 年度の作成期間をずらす、又は 5 年度に追い込むという提案か。

(秦野委員) もっと時間が必要であり、この回数でまとめの作成は難しい。

令和 4 年度第 3 回定例会の予定を少し前に倒す。その後、小委員会を 2 回実施し、2 回目の小委員会から作成に入らなければスケジュール的に厳しいと思う。

(石川委員) 必要な材料がないところでまとめを始めるのは、非常に厳しいのでは

ないか。

(秦野委員) アンケート調査の結果が材料としてある。

(石川委員) アンケート調査、ヒアリング調査の結果を令和4年度にまとめて形にし、5年度は作成することが中心になると思う。

始めに調査の内容や回数をどうするか、調査結果をまとめるディスカッション、ヒアリング調査など、色々な材料を整える。その次に、作成に向かい動き出すと、おおよそスケジュール案のとおりになるのではないか。

小委員会は6回まで実施できるため、定例会の2~3回の間あたりに小委員会を増やし、材料を整えるために検討を行うことも1つかと思う。

(秦野委員) 事例の研究など、アンケートの結果を待たずにできることを同時進行で手を付けなければ厳しいのではないか。フローチャートのイメージ等も大枠はつくり出せると思うため、それにアンケート調査やヒアリング調査の結果をどのように載せるかは全委員で検討していかないと少し厳しいと考える。

ただ、材料の揃い具合の必要性もよくわかるため、現時点でスケジュールは固めず、材料の集まり具合で時期を見直す余地を残してもらいたい。

(議長) 資料3-2の案では非常にタイトなスケジュールであり、後ろ倒しすると後が厳しくなってくる。ここは流動的に捉えて、臨機応変に対応していくということではいかがか。

もう1つ秦野委員が大事な指摘をされたが、令和4年度第1回、第2回定例会の検討事項に、事例の候補の収集や収集した事例の突き合わせを項目として追加することについてはいかがか。スケジュール案の概念図は、それを補った上で運用していくということで承認いただけるか。

何を拠り所として事例を集め、突合せを行うかという問題、すなわち柱の検討について、今回も含めた2回の定例会内で柱を固めていく作業が何より肝要である。

公民館の役割は、地域の魅力発信、地域住民の結び付け、あるいは地域課題の解決など色々な役割を担っているが、その中でどのような事例を取り上げることが最も適切で、ハンドブックとして役に立てるものになるのか。公民館に関わる方々と公民館を利用する方々の双方が見れるものを、どのような柱をもってより分けていくのか、あるいは収集していくのかについて、皆様の意見を伺いたい。

(小林委員) 前回の定例会で、世代・学びの好循環の話が出ていたが、例えば、民力アップ、人材育成、地域の質的エネルギーの向上、革新性を求めた仕組みづくり、自主性や当事者意識を喚起することを意図した事例から柱になるものを探っていくことになるのか。また、場合によっては、検討された

柱から更に、事例の再収集をするという逆の方向を取ることもあり得るかと思う。

また、SDGsの考え方を活用するということも考えられないだろうか。17の目標を環境問題、経済問題、社会問題と3層構造に整理されているが、柱を検討する際に、参考になる要素があるのではないかと思う。

(議長) これは大事なところであるため、時間をかけていきたいと思う。皆様から意見を伺いたい。

(小泉勇委員) 小林委員の意見は大事なことであると思う。併せて、いい取り組みであっても、例えば子どもに関する取り組みであれば、参加できる子どもが限られていると取り組みは継続していかないと思う。どのように人を集めることができたのかという視点があっていいのではないか。

(金子委員) 小泉委員が言うように、公民館を利用する方、利用しない方が別れているため、どんな状況であっても人が集まれるという点は大事になると考える。

(小泉喜亮委員) 柱を作っていくヒントを探す中で、資料3-1 P5に「発達特性の理解」「子ども多様性」等、参考となるヒントが挙げられているため、これを生かしていきたいという思いが根底にある。

例えば、現状で公民館に人を集めることを例にすると、10～20年前であれば青少年部や体育部等の地域運動会や理科の科学実験といった事業で人が集まっていたが、現在の子どもたちはスマートフォンを弄り自分の部屋から出てこないような時代であり、やり方を少し変えていく必要もある。柱を子どもオンリーにするのではなく、その保護者、祖父母を含めた異年代交流、多世代交流に特化して、例えばフードドライブの食材配布拠点になると、人が集まってくるのではないかと感じている。アトラクション性を持たせたイベントよりも、今コロナで困窮している、心も体も疲れている人たちを癒すような場を提供していくと、また違った意味で人が集まれる拠点となるのではないかと思う。

それらも含めて今後の柱を、昔の公民館のような環境に戻すのではなく、新たなつどいの場にしていくようなイメージをもった柱にしていきたい。

(議長) 子どもが進んで参加できる環境の重要性や異年代交流の話があったが、「楽しめる・役に立つ・みんなとつながれる」自分が高められるという実感が湧くといいのではないか。

(安西委員) 令和4年度にアンケート調査を行うことになると、アンケート調査はコロナにより事業実施に制限があることが前提となる調査か。それともコロナ禍前の事業を行っていた時期が前提となる調査か。アンケート調査を実施し、その結果が今後の研究調査の基礎となるが、前提の考え方によっ

て答え方が全く違うと考える。

私の地元である地区では、わんぱく相撲が少々問題となっている。わんぱく相撲大会は毎回非常に盛り上がるイベントである。しかし、コロナ禍のため2年間中止しており、来年度の実施について現在協議しているが、コロナで一時事業が途絶えたことにより、これまで高学年の児童が男女関係なく取り組んできたことに抵抗感が生じ、問題があるのではないかという意見が一部の生徒からも出ている。これまで積み重ねてきたことが、コロナの影響でできなくなってしまう難しい時代になってきていると感じている。

それがアンケート調査実施にあたり一番疑問に思うことであり、それがはっきりしないと次に進んでいかなないのではないかと考える。

(大橋委員) 私が今年度女性学級の保育スタッフとして携わった際に感じたことであるが、その講座は地域の大学生2名が運営に関わるなど、地域に大学を巻き込んだいい取り組みだと思うが、講座の内容は化粧やチアダンスなどでカルチャースクールのように感じた。

6～7年前に関わった成人学級では、水をテーマに講座を9回程開催し、様々な角度から水について学ぶため、浄水場見学、簡易トイレの作り方、顕微鏡観察等を実施した。50～80代の方が参加し、大半の方が皆勤賞であった。一見取っ付きにくい内容ではあるが、参加する度に新たな知識を得ることで、知る喜びを感じられたことが受講者が休まずに参加する要因になったのではないかと思う。

いくつものテーマを取り上げるのではなく、1つのテーマを様々な観点から掘り下げてみるのもいいのではないか。私が学生の頃は、一番後ろの席で講義が早く終わることを待っていた。大人になってからの学びというのは、「一番前の席で聞きたい、まだ知らないことを知ってみたい。」という好奇心や学びの楽しさを得られることが重要であり、そのような取り組みをつくるのが、地域住民の精神的な健康につながり、それがいい地域になることに通ずるのではないか。そのような事例や運営の仕方が大事ではないかと感じた。

(若林委員) 発達サポート講座の手伝いをしているが、受講者の表情から学びたいという意思を感じる。受講者には自身の孫のことが気になり受講している方もおり、子どもの多様性、発達特性の理解というのが全市的に広がると子どもに対して優しい眼差しを持つ大人も増え、本市が穏やかに過ごせる地域になるのではないかと思う。何歳になっても学びの場があり、知らないことを得られる機会が増えると人は成長していけると思う。各地域にある公民館で気軽に学べる場が作れたらいい。

市内の全公民館で共通の課題、同じ講座ができると面白い試みになるのではないかと。発達サポート講座の修了者で学校ボランティアに参加した方から、「子どもたちが多様化しており、先生だけでは手が足りないと感じた。」との話を聞き、そうした理解者が地域で増えれば学校の応援団として地域全体が活性化できるのではないかと考えた。公民館を学ぶ場として活用して、理解者を増やしていけたらいい。

(議長) 未知のことを知る喜び、学んだことが次の活動につながるということが1つヒントになるのではないかと考える。

(石川委員) 過去の事例で、どのようなテーマで、どのような方法が上手くいった、それを違う形に変えてもできるのではないかとするような、1つの事例をヒントにして、違う形や方法で工夫した提案をしてみてもどうか。

資料 3-1 P5 に挙げている項目すべてを取り上げるのは難しいため、ある程度数を絞り、その実践例と改変例を、これは心の健康に使える、あるいは体の健康に使える、あるいは社会的な参加に使える、年代によってこのように使えるといったように、色々な使われ方も提案した形でやってみるのはどうか。ある程度バリエーションがあり、自分のところで取り組むときには、この方法ならできそうだというようなモデルができたらいと思う。

(議長) 実践例をどう改変・改良したら横に広がっていくかなど、各館で応用できるモデルができるといい。また、コラム形式などで、こうすると失敗事例になるというものも載せられるといいと思う。

(秦野委員) 1対1で当てはまる事例というのは難しいと思うが、事例がどの視点でどのように使えるか、1つの事例に対してマークがいくつか付くというように集められたらと考えている。

資料 3-1 P5 には、柱になりそうな項目がいくつか挙げられているため、見方によってはこの事例はこれにつながるのではないかとという視点で集められるといいと思う。

第2回定例会で小泉喜亮委員が話していた子ども食堂のように、例えば、こういう団体とこういう団体が協力して、成功した取り組み事例を1つのフローチャートとして形作れると、他の事業でもあの事例をこのように使ったらできるというヒントになるかと思う。委員の皆様がこれまで見聞きした事例で、前期に挙げた項目につながりそうな事例を、1つ2つ持ち寄るとそこから柱を決めるヒントになるのではないかと。

(小林委員) 事例に関して、例えば、公民館や地域のありたい姿とは、どういうものかというこれから目指したい将来像、理想像を描く。次に、その描いた理想像に現在なっていない構造的な理由の要因分析をする段階を経て、その

後、構造を変える必要な部分に取り組むという未来を創造するタイプの事例。

一方、現在、公民館や地域が抱えている課題の探求からまずスタートし、その後、課題の解決策の検討に入るといった、いわゆる課題解決型の対症療法的なタイプの事例等々、多様なパターンがあると思うので、それらも視野に入れておくことも必要かと思う。

(議長) 各地域のまちづくり協議会で様々な報告書を出している。報告書には、このような提案を補うと更に良くなるということが箇条書きで書かれているため、それを参考にすることで、先程の要因分析の裏打ちになるのではないか。

(海野委員) アンケート調査手法にある、市・公民館ホームページや公民館配架では、ホームページを見る方や公民館に来る方が主な対象になり、能動的な意識を持った方が調査対象の中心になると思う。普段ホームページを見ない方、公民館まで足を運ばない方、そういう方々がどうしたらいいのかということの意見を集められるといいと思う。

アンケート調査による市民の認識やニーズ、調査研究をどのような形でまとめ上げるか、誰のために提案するか、それによって事例の柱を見つけるヒントになるのではないか。

先日のテレビで住みよい街ランキングの上位に埼玉県川口市が上がっていた。川口市は、公民館の活動や行政区のシステムづくりが一体となっており、公民館だけでどうするかということではなく、周囲を巻き込める形をつくることができればいいのではないかと思う。色々なことを巻き込んだ形での事例を期待している。

(水谷委員) 一般論となってしまうが、私は会社を辞めるまで公民館等の市施設に行ったことがなかった。それらの施設を利用するには2つ問題があると考え。1つは敷居が高いことであり、敷居というのは公民館等の施設を知らないということや、一人又は少人数で行っても利用団体の圧迫感があり入り難い、利用し難いという敷居の高さをどのようにして下げるか。もう1つは、公民館等に行くことで得するものがあるか、物品ではなく面白い・楽しい・満足感・連帯感・自己肯定感という得するものがなければ人は公民館等には行かない。そういう敷居と得するものの観点でできるといいと思う。

(副議長) 公民館は、職員や専門部員や地域の方々など大勢の方に関わっていただき、どのように公民館活動をしていくか、コロナ禍でもできることはないかなど、日々努力していただいている。コロナ禍では子どもや体育関連の事業は断念することが多いが、それでも何かできることはないか話し合

い、計画を立てている段階である。そういう状況にあることは、皆様にもご理解いただければと思う。

先日、秦野委員に講演いただいた公民館のつどいでは、上鶴間公民館と相原公民館が、コロナ禍で何ができるのか、どのような取り組みをしているか事例発表を行った。

(議長) どのような事業であっても目標とする事業が、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」のどれかにつながっているという認識がある。それが一番大きいポートフォリオでいえば三分割したどこかの領域に掛かっている。更にその下にある言葉として、「人づくり」でいえば人材育成、能力開発、次世代育成、自己実現意欲。「つながりづくり」では、支え合う、助け合う、自他尊重、あるいは学びと活動への結び付け。「地域づくり」では、共生社会、地域の担い手、地域課題への関心などの言葉が出てくるのではないかと思う。

ポートフォリオの中で、これらの言葉と、資料 3-1 P5 の枠内の項目をリンクさせ、ポートフォリオやマップでどこかにポイントを打っていく。多数つながりが出てくると思うが、それらのものを1つ指標として取り上げればいいのか。

これらのことを記録で整理し、皆様にお目にかけるということによろしいか。

(全委員) 承認する。

## 2 その他

各種委員会等への委員の派遣については、現職の委員が任期中であることから、引き続き派遣することについて承認した。

- ・あじさい大学運営委員会 小林委員
- ・市立図書館協議会 金子委員

古矢議長のあいさつにより、会議を終了した。

以 上

令和3年度 第4回社会教育委員会議定例会出欠席名簿

	氏名	所属等	備考	出欠席
1	小泉 勇	相模原市立小学校長会		出席
2	金子 友枝	相模原市文化協会		出席
3	小泉 喜亮	相模原市PTA連絡協議会		出席
4	大谷 政道	相模原市公民館連絡協議会	副議長	出席
5	安西 信行	相模原市青少年関係団体連絡会		出席
6	大橋 千景	虹のおはなし会		出席
7	若林 由美	一般社団法人星と虹色なこどもたち		出席
8	石川 利江	学識経験者（桜美林大学教授）		出席
9	秦野 玲子	学識経験者（RE Learning代表）		出席
10	古矢 鉄矢	学識経験者（学校法人北里研究所参与）	議長	出席
11	小林 政美	学識経験者（特定非営利活動法人男女共同参画さがみはら 副代表理事）		出席
12	海野 浩	公募		出席
13	水谷 英正	公募		出席
14	雨宮 健一郎	特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク		欠席